

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19530737

研究課題名（和文） 音・声・音楽を中心とした乳幼児期の表現教育の構築

研究課題名（英文） Construction of early childhood education for art expression focusing on sound, voice, and music.

研究代表者

岡本 拓子（OKAMOTO HIROKO）

高崎健康福祉大学短期大学部・児童福祉学科・教授

研究者番号：80309442

研究成果の概要：

本研究では、子どもと音との素朴なかかわりや音楽的表現の芽生えに着目し、保育における音環境のあり方と、意識的な音環境づくりがどのように子どもの表現教育へと繋がるかについて検討した。音環境に関する物理的調査（環境機械論）とサウンドスケープの思想（環境意味論）に基づき、①音圧測定による園の音環境の実態調査、②保育者の意図的な音環境づくりと子どもの活動との関連に関する調査、③これらの調査結果に基づいた、「望ましい音環境」のあり方とそれらをいかした保育に関するチェックリストの作成を行った。また、保育者を対象に、チェックリストを用いた予備調査を実施し、今後のチェックリスト改良のための検討すべき課題を明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：音，環境，音楽，表現，サウンド・スケープ

## 1. 研究開始当初の背景

### 保育現場における劣悪な音環境の問題

幼稚園や保育所における音楽活動のあり方は、園の保育方針や保育者の保育観によって様々であるが、運動会での鼓笛や音楽会や生活発表会での合奏を披露するための過度な練習を子どもに強いる園も決して少なくない。そこでは子どもの自発的な音楽表現を促すというよりも、保育者主導で型にはめ込む教え込みが行われる可能性が高く、幼稚園教育要領に示されるような、子どもの「豊かな感性」を育むための音楽教育が行われているとはいえない。

さらに、度を越す練習によって長時間大きな音を聴き続けなければならない音環境の中で子どもが過ごすことにはさらなる問題があると考えられる。日常の保育における騒音を調査した志村（1998）の研究によれば、調査した都内の私立幼稚園での音環境は、学校環境衛生上の基準値をはるかに超え、通常の場合で70～80dB、音楽を伴う活動（歌・体操・演奏など）や、走り回るなどの活発な遊びが行われる場合では、90～100 dBに達するほど大きいものであった。80 dBとは交通量の多い道路程度、90～100 dBは電車のガード下程度の騒音に相当する。保育室のこのような音環境は、子どもの聴力の低下のみならず、精神衛生にも悪影響を及ぼすのではないかと懸念される。近年、落ち着きのない子や集中力の低下などが問題とされているが、子どもにとって落ち着いたり集中したりできる十分な環境が整えられているとは言い難い。また、自然音や生活音の認識が10年前と比較してかなり低くなっているとする水野ら（2002）の報告もあり、常に騒音ともいえる音環境の中にいる子どもの音に対する感覚は鈍化していることがうかがえる。

筆者らは、このような保育現場における音

環境の劣悪さが、子どもの音への関心を薄れさせ、そのことが意欲的に表現することを阻害しているのではないかということ为本研究の問題としてとらえたい。

### 子どもにとって望ましい音環境のあり方

志村（2003）は、静けさをもたらす要因として、①保育者の担当する子どもの人数、②子どもの年齢、③保育室の形状・形態、④吸音素材の使用を挙げているが、本研究の研究分担者である吉永ら（2004）の研究によると、日ごとくに意識的に音環境をくふうしている2つの幼稚園の調査では、志村の実施した幼稚園よりも音圧が低く、70 dBを下回ることが頻繁であった。このことから、保育室の望ましい音環境づくりの要因として、①活動に集中できる環境設定への配慮、②よく「聴く」ことの指導、③楽器の使い方に対する配慮など、保育者の認識のあり方や指導法のくふうによって改善が可能であることが示唆されている。

## 2. 研究の目的

保育者の意識的な音環境づくりにより、子どもたちが身近な自然音や生活音に触れることや、それらをよく「聴く」ことを通して五感を研ぎ澄ます経験を積み重ねることが、子どもの音や声や音楽に対する感覚を培うことに繋がるのではないだろうか。したがって、子どもの「豊かな感性」を育むための表現教育を考えるためには、まずは子どもをとりまく音環境の改善と、音に対する意識を高める必要がある。本研究では、保育における望ましい音環境のあり方について検討することから出発し、保育者の意識的な音環境づくりは、どのように保育実践にいかされるのか、またそのことが、子どもの表現の教育へとどう繋がっていくのかについて検討する

ことを目的とした。

まず、志村や吉永らの先行研究を参考に、幼稚園・保育所における音環境の実態を調査する。子どもたちが日ごろどのような音環境の中で過ごしているかを把握するため、志村が実施した騒音計による保育室の音圧測定を行った（研究1）。また、複数の幼稚園における自然観察を通して、園の音環境を構成する要素をリストアップし（研究2）、それらを基に、物理的環境、人的環境、保育のあり方などの側面からなるチェックリストを作成して客観的評価を行った（研究3）。これらの調査から、保育における望ましい音環境のあり方とはどのようなものかを明らかにする。また、保育者への聞き取り調査から、保育者の音環境に対する意識や配慮についても明らかにした。

### 3. 研究の方法

本研究では、まず先行研究の概観として、子どもの音環境に関する物理的調査（環境機械論）とサウンドスケープの思想（環境意味論）に関する先行研究を概観した。そして、音に耳を澄ませることが、保育者や子どもにどのような心の変容をもたらすのかという、保育にサウンドスケープ導入の意味と可能性について考察した。

研究1では、志村や吉永らの先行研究を参考に、幼稚園・保育所における音環境の実態を調査する。騒音計（リオン普通騒音計 NL-22）を用いて、子どもの活動（一斉活動）時の保育室内の音圧を測定し、あわせて行った観察と録画データから、保育室における騒音の推移と子どもの活動や保育者のかかわりとの関係を分析した。

研究2では、これまで園環境への配慮が積極的になされ、それらをいかした保育を行っている2つの幼稚園の実践を取り上げ、どの

ような音環境の中で子どもたちが過ごし、音や音楽と関わっているのか、またその中で保育者は、音に対してどのような配慮をし、意図的な環境づくりを行っているかを、自然観察を通して明らかにした。また、これらの結果から、子どもにとっての「望ましい音環境」のあり方とそれらをいかした保育について空間的・物理的環境、人的環境、保育の内容・方法・援助、子どもの様子の4項目からなるチェックリストを作成し、保育者が自身の保育を評価する際の指標を提案した。

そして研究3では、研究2において作成したチェックリストの妥当性を吟味し、より精緻化したリストへと改良することを目的として、5つの幼稚園・保育所の保育者を対象としたチェックリストによる予備調査を実施し、そこから導き出された保育現場の音環境に対する意識（または、その傾向）について明らかにするとともに、今後のチェックリスト改良のための検討すべき課題を明らかにした。

最後に、研究1・2・3の結果を踏まえ、園における「望ましい音環境」のあり方と、子どもにとっての音楽的な経験、音としての世界の経験が、子どもの表現教育にどのように繋がっていくのかを総括した。

### 4. 研究成果

研究1：保育室の音環境と子ども一音の物理的調査と観察から

(1) 保育室における子どもの一斉活動の観察と騒音測定

広島県私立K幼稚園において、一斉活動における保育室の騒音の変化を、子どもの耳の高さに騒音計（リオン普通騒音計 NL-22）を設置して測定した。観察と録画データ、および聴き取り調査に基づき、保育室の騒音の変化と観察記録を照合し検討した。

騒音測定では、活動的な遊びの際には80dBほどの数値を示すこともあるが、保育者の話が始まるような場合にはすぐに50dB付近まで減衰するような推移が見られた。この変化は、活動内容のメリハリの度合いを示しているといえる。K幼稚園では、保育者の指示で「聞かせる」のではなく、日常生活の中での子どもたちの活動や、興味・関心のあり方をよく把握することにより、子どもたちが期待をもって「聴きたくなる」ような、その日の生活と関わりのある話題を用意する。そうした配慮が、子どもたちの「聴く態度」を育て、結果的に「望ましい音環境」を生み出しているといえる。

#### (2) 保育室の音響と子どものあそび

東京都文京区私立Y幼稚園、および広島県廿日市市私立K幼稚園の2つの園において、室内遊びを観察するとともに、そのあそびが展開されている場においてカプラあるいは積み木で床を叩き、波形分析ソフト(CAT-WAVE)を用いてその音響(音のエネルギーの減衰)を分析した。

その結果、残響の多い場では動きのあるあそびや自ら音や声を出すあそびが行われ、残響の少ない場では、ままごとのように静かに話しあったり協力して製作しあったりするようなあそびが行われる傾向にあること、また、床の素材を変えてモノの配置をくふうしたりすることで、保育室内にも音の響きの異なる空間がつくられていることがわかった。

#### 研究2: 2つの幼稚園の実践例とチェックリスト作成

東京都文京区私立Y幼稚園、および広島県廿日市市私立K幼稚園の2つの園における定期的な観察を通して、子どもにとっての「望ましい音環境」を以下のようにまとめた。

- (1) 物理的・空間的要素
  - ・ 場の特性と遊びの特性を考慮した空間づくり。
  - ・ 音・音響のフィードバックが可能となる空間づくり。
  - ・ 様々な音や音楽に出合う環境づくり。
  - ・ 遊具の質感やモノが発する音に意識を向ける配慮。
- (2) 人的要素
  - ・ 友だちの声、言葉、音が遊びを誘うことへの着目。
  - ・ 遊びの中で自分の発する声や音に気づく働きかけ。
  - ・ 人的な音環境としての保育者の存在を意識する。
- (3) その他の要素
  - ・ 五感を働かせる中での「聴く」行為を意識する。
  - ・ 様々な音への気づきを促す配慮、音環境の精査

これらの結果を基に、保育者自身が「望ましい音環境」について考え、それらをいかした保育を実践するためのチェックリスト試案を作成した。このチェックリストは、物理的・空間的環境、人的環境、保育の内容・方法・援助、子どもの様子の4項目からなり、保育者が自身の保育実践を振り返り評価するための指標を示している。

#### 研究3: チェックリストを用いた保育者へのアンケート調査

研究2の結果を基に作成したチェックリストを用いて、保育者への予備調査を実施した。チェックリストを用いての評価に加え、自由記述の分析も行った。

その結果、今回の予備調査を通して、チェックリストを用いることにより、保育者の音環境に対する意識を高め、保育のふりかえり

や様々な気づき・工夫を促す可能性が示唆された。その他、調査によって明らかにされた事項は以下の通りである。

(1) 保育現場の音環境に対する意識（または、その傾向）について

まず、保育者は、物理的・空間的環境及び人的環境といった具体的な音の環境については意識を向けやすいが、保育内容・方法・援助及び子どもの様子から音環境をとらえ直すという点についてやや意識が向きにくいようである。保育の経験年数による差はみられなかったが、職階によって、園長・主任・担任の間に、捉え方や評価の甘さ・厳しさに差（担任は評価を厳しくつける傾向）がみられた。また、担当するクラスの子どもの年齢によって、音環境に対する意識の持ち方や配慮のあり方が異なるようだ。

園による全体的な意識の差については、保育のあり方と関係しているようである。今後、音環境に対する意識と保育との関連について調査・吟味することが求められる。

(2) チェックリスト改良のための検討事項について

チェックリストの記入方法について、○・△・×という3段階評価のままでよいか、検討の余地がある。記号で記入する場合、それぞれの記号の示す意味や評価の基準について明確に示し、事前に評価者の共通理解を図る必要があるだろう。また、それぞれの質問文について、その主語（保育者または子ども）を明確にしなければならない。特に、子どもを主語とする場合は、個人差の取り扱いについて指標を示す必要がありそうだ。

次に、予備調査で指摘のあったわかりにくい抽象的な用語を中心に、各項目の文言を丁寧に吟味することが必要だろう。抽象的な表

現については、保育者がイメージしやすいように具体例を挙げるなどの表現上の工夫が求められる。

また、今回の調査により、子どもの年齢や発達によって、音環境への意識や配慮のあり方が異なることが明らかになった。したがって、チェックリストの質問項目を発達の流れに即して配列したり、発達段階ごとにリストを再構成する（乳児編・幼児編など）といった改良が今後必要となるだろう。さらに、保育者の意識を高め、気づきを促すような項目の立て方、配列の仕方について、チェックリスト改訂にむけて再度細かく内容を吟味し検討していく必要が示唆された。

#### 文献

志村洋子 甲斐正夫 1998 保育室の音環境を考える (1) 埼玉大学紀要教育学部第47巻第1号

水野智美 徳田克己 里美幸子 2002 発達の視点からみた自然音・生活音の認識の実態－10年前の結果との比較を通して日本保育学会第55回大会資料

志村洋子 2003 幼稚園・保育所における保育室内の音環境－コミュニケーションを支える音環境騒音制御第27巻2号

吉永早苗 奥山清子 稲森義雄 2004 子どもの音環境に関する研究(1)－幼稚園・保育園の室内における望ましい音環境について ノートルダム清心女子大学紀要第28巻第1号

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

岡本拡子・新開よしみ・吉永早苗・松寄洋子・無藤隆 音環境をいかした保育－「望ましい音環境」のためのチェックリスト試案 高崎健康福祉大学紀要第8号、49～67項、平成21年3月、査読有

吉永早苗 子どもの音環境に関する研究  
(Ⅲ) - 「サウンドスケープ」思想の知見から - ノートルダム清心女子大学紀要 第33巻第1号、88～100項、平成21年3月、査読有

[学会発表] (計3件)

①岡本拓子・吉永早苗・松寄洋子・無藤隆  
音環境をいかした保育(1) - 「望ましい音環境」のためのチェックリスト試案 - 日本保育学会第62回大会 ポスター発表 千葉大学 平成21年5月

②吉永早苗・岡本拓子・新開よしみ・松寄洋子・無藤隆  
音・声・音楽を中心とした乳幼児期の表現教育の構築(2) - 保育室における子どもの表現活動と音響の関係について 日本発達心理学会第20回大会 ポスター発表 日本女子大学 平成21年3月

③吉永早苗・岡本拓子・新開よしみ・松寄洋子・無藤隆  
音・声・音楽を中心とした乳幼児の表現教育の構築(1) - 保育室における子どもの活動の観察と音圧測定 - 日本発達心理学会第19回大会 ポスター発表 大阪国際会議場 平成20年3月

[図書] (計3件)

①岡本拓子 「音・音楽に対する感性と表現」 新新・保育講座『保育内容「表現」』第7章 ミネルヴァ書房 平成21年10月発行 予定

②岡本拓子 「表現から遊びへ」 新保育ライブラリ「保育内容表現」コラム 北大路書房 110項 平成21年4月 査読有

③吉永早苗 「子どもと音楽」 新保育ライブラリ「保育心理学」第5章第1節 北大路書房 108～116 平成21年3月 査読有

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡本 拓子 (OKAMOTO HIROKO)  
高崎健康福祉大学短期大学部・  
児童福祉学科・教授  
研究者番号：08309442

### (2) 研究分担者

無藤 隆 (MUTO TAKASHI)  
白梅学園大学・こども学部・教授  
新開 よしみ (SHINKAI YOSHIMI)  
東京家政学院大学・家政学部・講師  
松寄 洋子 (MATUZAKI YOKO)  
埼玉学園大学・人間学部・准教授  
吉永 早苗 (YOSHINAGA SANAE)  
ノートルダム清心女子大学・人間生活学部  
・准教授

### (3) 連携研究者